

神川龍馬：藻類学会の思い出

私の研究興味は「ゲノムの縮退や遺伝子進化、またそれらに伴う細胞内の機能進化」である。そのため藻類だけではなく様々な原生生物を「材料として」用いることで研究を遂行しているが、主に藻類を扱うことが多い。何故か？藻類には、「非藻類」と同様に核ゲノムやミトコンドリアゲノムを持つが、さらに葉緑体ゲノムも有している。そしてある種の藻類は細菌類を細胞内共生させているという例もあり、一つの種（または株）を扱うことで、「非藻類」よりも多くのゲノムに触れることができるからである。さらには葉緑体ゲノムやミトコンドリアゲノムから核ゲノムへの遺伝子移動という現象を通じて遺伝子進化を研究することもできるという、僕のような興味を持つ人間にとっては夢のような材料なのだ。

私が藻類と真面目に触れ合うようになったのは、大学4回生の冬からである。本当は春からラボに所属していたわけであるが、今から思えば完全に手を抜いていた。部活動が忙しかったため、朝練と夕練に出なければならぬし、体も休めなければならない。その上夜は夕練に参加してくれたOBとの酒席があるため、その合間を縫ってラボに顔を出すという体たらくであった。部活動も引退した冬からは卒業を目指し、「有毒な渦鞭毛藻類の分布を、遺伝子を使って明らかにする」というテーマに対して、それこそ寝る間も惜しんで培養、観察や実験をした。眠くなるとラボにある椅子をつなげてベッド代わりにしたり、他の人の白衣を何枚も重ね着して布団代わりにしたりしたもの、今となってはいい思い出だ。ちなみにその頃は、そんな学生が何人かいたので特に変わっていることをしている感覚は無く、「学生とはこういうものなのだ」と信じて実験にいそしんでいたわけである。いつしか卒業のためや学位のためという理由ではなく、単純に興味があるから実験して確かめる、というモチベーションへと変化した。そのモチベーションは今でも変わっていない。

私が所属していたのは、名前は伏せるが農学部の水産系のラボで、参加する学会と言えば日本水産学会であった。そんな私が日本藻類学会に入会し、学会に参加するようになったのは2006年に鹿児島大学で開催された第30回日本藻類学会大会からである（そこから会費の支払いを忘れて、後から謝罪とともに支払ったりしながら現在に至る）。農学研究科の修士学生となっていた自分は、何を思ったか指導教官も参加したことが無いような学会に丸腰で飛び込んだわけである。その際、年が比較的近いラボOBであったKT博士に文章にできないほど冷たくあしらわれ心の底から傷付いた「鹿児島大学学食事件」は、今でも酒の席で出てくる笑い話となっている。



経験した学会も少なかったため、それまでに参加したことがある水産学会と同様、「必ずスーツで参加しなければならない」と当時の私は強く思いこんでいた。もちろんスーツの方もいたが、そんな不文律のようなものはなく、他の学生は私服で参加しており自分の経験不足を嘆いた。ちなみに腰から手ぬぐいをぶら下げた人もいたし、ジャージで発表している人もいた。断っておくが、そんな彼らも今や立派な博士となって世界を舞台に活躍されている。この状況でばっちりスーツとネクタイ、革靴という就活状態で登場し、「鹿児島は南にあるのだ」と改めて思い出させてくれる気温で汗ばんでいた私を、数少ない知り合いは苦笑いで迎えてくれた。

学生時代の藻類学会での思い出はこれだけのはずが無く、他にもここに書けないようなこともたくさんある。しかし、それらの大半は普段忘れていている。今回寄稿の依頼があり、学生時代を思い出そうとボーっと考えた時によりやく蘇った。現在学部学生や大学院修士として研究されている学生の方々が「若手」と呼ばれる年になる10年後の70周年若手メッセージの寄稿では、日本藻類学会に対するどのような思い出や思い入れを語っていただけるのだろうか。アカデミックな世界に進まれる学生の方々も、社会へ飛び出していられる方々も、藻類学会への参加や藻類研究を通じて、一生忘れない思い出やふとした時に脳裏に浮かぶ情景を手に入れてほしいと切に願う。そんな未来への期待、学生時代の藻類学会での思い出を綴った稚拙な文章と「日本藻類学会創立～周年」が未来永劫続いていくことへの祈念を持って、創立60周年記念若手メッセージと代えさせていただきたい。

(筑波大学生命環境系)